



不器用な戦士たち  
眉村 卓  
講談社

(12/20刊・¥980)

十篇の作品の全部が、サラリーマンを主人公にしている。大半の主人公は、中小クラス  
の企業社員（役職は、係長課長ぐらい）で、  
しかも、実直であるが故に、落ちこぼれかか  
っている、という設定。これは、著者の小説  
全般にいえることでもあって、自信満々、何  
の疑いも抱かずに行動あるのみ、なんて主人  
公はちょっと考えられない（第一、設定であ  
る中間管理職の立場では、そんなことをした  
くても、できないだろう）。物語の前提がまず  
そこにある。しかし、彼らの前には、常識に  
外れた（現実にはありそうにない）無理難題が  
持ち込まれるのだ。きて、どうするか。ない  
ことを、観念的ではなく現実的に処理してい  
かなければならない。もし、会社にPTAが  
出来たら、自分の予感が次々と的中したら、  
変人ばかりの課の課長に任命されたら、窓際  
族グループに追放されたら、将来独立して成  
功すると未来人に告げられたら、あなたは会  
社の中で何をしますか。たとえありえなくと  
も、タテマエはタテマエという会社と、心や  
さしき主人公との、これは矛盾の物語でもあ  
る。中では、「出色の新人」「妙な仕事」「お  
だての階段」などが印象に残った。

（俊）